

〔翻 訳〕 (Übersetzung)

ヘルマン・クルツケ 『ドイツ文学最小史とその他のエッセイ』から

—第1部 第1章と第18章—

六 浦 英 文 訳

第1部第1章

排除/抑圧の蔵書 トーマス・マン『ファウストゥス博士』

私の両親の家では大いに読書が行われた。しかし読んだのは二流、三流の作品にすぎなかった。私の父は物理学者で、終戦の際にアメリカ人に感謝する理由があった。というわけで、わが家の書棚はイギリス・アメリカの文学で満たされることになった——大部分は無名作家の作品で、シリーズになっているミステリー小説や『リーダーズ・ダイジェスト』(Reader's Digest)の選書であった。現在でも知られている作品はごくわずかである。そこには、マーガレット・ミッチェル(Margaret Mitchell)(もちろん『風と共に去りぬ』《*Vom Winde verweht*》の作家である)が、ジョン・スタインベック(John Steinbeck)の『エデンの東』《*Jenseits von Eden*》と並んでいた。セシル・S. フォレスター(Cecil S. Forester)¹⁾はホーンブローワー・シリーズの長篇小説によって代表されていた。そしてトマス・ウルフ(Thomas Wolf)は『天使よ、故郷を見よ』《*Schau heimwärts, Engel*》によって代表されていた。特に購入される機会に恵まれていたのは、キリスト教の背景を持つ作家たちであった。ソントン・ワイルダー(Thonton Wilder)とブルース・マーシャル(Bruce Marshall)²⁾、C. S. ルイス(C. S. Lewis)、そしてウィリアム・フォークナー(William Faulkner)『八月の光』《*Licht im August*》)までもその系列に入れられていた——しかし、それらは愛読書にはならなかった。もっとも、私の両親は、購入した本を律儀に最後まで読んだのだが。しかし、われわれは本当のお気に入りの書物は、一度ならず何度も読むものだ。本は斜め読みにされて初めて、その内容の質が証明されるからだ。アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway)は欠落していた。というのは、ヘミングウェイはニヒリストで自殺者であり、スペイン市民戦争では коммуニストの側に立ち、道徳的には正しくないとして評価されていたからだ。ほかにどんな作家が欠けていたのだろうか。も

1) [訳注] イギリスの戦記、海洋小説家。ネルソン時代の海軍士官ホレイショ・ホーンブローワーの一代記の連作などを書いた。

2) [訳注] スコットランドの小説家。カトリック信仰を基盤とする小説を書いた。

ちろん左翼の作家たちであった。ベルトルト・ブレヒト (Bertolt Brecht) とアンナ・ゼーガース (Anna Seghers) である。そして漠然とした包括的な形で嫌疑を受けていた亡命者たちは、おそらく祖国喪失者の疑いを持たれていたのだろう。トーマス・マン (Thomas Mann) については『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』 (*Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull*) があるだけであったが、これは面白い作品と見なされていた。そしてまたグルッペ47の作家たちも欠けていた。ベル (Heinrich Büll) とグラス (Günter Grass), イェンス (Walter Jens) とアイヒ (Günter Eich), フリッシュ (Max Frisch) とヴァルザー (Martin Walser) をこのカテゴリーに入れるのは難儀なことであった。そのほかにドイツの現代文学に関して現存していたのは、たいていはキリスト教系の国内亡命者の系列に属する作家たちであった。ヴェルナー・ベルゲングリューン (Werner Bergengruen) は『天井にも地上にも』 (*Am Himmel wie auf Erden*) によって登場し、ランホルト・シュナイダー (Reinhold Schneider) は『ラス・カサスとカール5世』 (*Las Casas vor Karl V.*) によって登場した——しかも、後者は1938年の初版で登場したのだが、これは逃亡家族の蔵書では第一級の希少本であった。というのも、1945年にわずかの荷物を抱えて西側へ移ったときには、この書物は欠くことができないもののように思えたからだ。

これが、1950年代の終わりに、若者として方角を定めなければならない時期の私の環境だった。わが家には長い間テレビがなかったので、私は大いに本を読んだ。しかし、私の両親の蔵書は私の故郷にはならなかった。それらの書物で時間をつぶすことはできたが、頭とこころの飢餓を鎮めることはできなかった。問いかけをしないことにも慣れてしまった。というのは、有効な答えを持ち合わせなかったからだ。愛や性についての問いにも、アウシュヴィッツ〔強制収容所〕に関する問いにも。両親の文芸批評に関する判断には、極論を誘発するようなものはほとんどなくて退屈であった。書物に関する意味のある議論などはまったくなかった。何事も胸に収めて無言で我慢した。あてもなく夢を見続けた。1960年には17歳になっていて、たくさんの書物を読んでも何もわかってはいなかった。私の読書は、巻き込まれた抑圧過程の持続の一部であったし、その過程についての啓蒙ではなかった。

本来、年長者用の書物がなかったということがすでに問題であった。1945年という時代は切り取られたようなものだったのだ。ナチスもその敵対者もいなかった。無害な娯楽文学すらもこの時代からは生まれなかった。だがしかし、それ以前の時代からも何一つ生まれてはいなかった。ヴァイマル共和国の偉大な作家たちはいなかった。カフカ (Franz Kafka) やムージル (Robert Musil) あるいはデーブリン (Alfred Döblin) もいなかった。トゥホルスキー (Kurt Tucholsky) あるいはヨーゼフ・ロート (Joseph Roth) もいなかった。さらにさかのぼってみても、フォンターネ (Theodor Fontane) もビューヒナー (Georg Büchner) もハイネ (Heinrich Heine) も見いだせなかった。シュティフター (Adalbert Stifter) もアイヒェンドルフ (Joseph Freiherr von Eichendorff) も。ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) もシラー (Friedrich von Schiller) も。ヴィーラント (Christoph Martin Wieland) もレッシング (Gotthold Ephraim Lessing) も。いかなるユダヤ人も——これは

蔵書の発生からおのずと生じたものだった。私に何が欠けているのか、当時はわからなかったが、両親の蔵書の前に立つと、おぼろげながらも不満足な感情が頻繁に沸き起こってきた。それらの書物には生命のにおいがしなかった、時々ピクリと動いたり、まだ冷え切っていない死体のようで、重病人のように生気がなかった。

それは、私が21歳でトーマス・マンを読み始め、別の世界への扉が開かれた時代だった。確か、1964年のことだったと思うが、ある友人が『ファウストゥス博士』(*Doktor Faustus*)をプレゼントしてくれたのだ。私は副専攻にドイツ語学・文学を取っていた神学専攻の学生だった。私は真理、告白、実存的な答えを探求した。そしてまた、それを見つけたのだ。すなわち、信仰の問題、恭謙と高慢、罪と恩寵、劫罰と救済をめぐるアードリアーン・レーヴァーキューン (Adorian Leverkühn) とゼレーヌス・ツァイトブローム (Serenus Zeitblom) との対決のなかに。キリスト教徒の知識人ならだれでもそのことを知っている。すなわち、恭謙であることを欲することを。しかし、アードリアーン・レーヴァーキューンのように、認識と洞察が高慢を生み出すということを体験する。笑いのモチーフは——幾分か嘲りを含んだ洞察を有する例の嘲笑的な高笑いのことだが——私より優れているある友人のことを思い出させた。私は神学的にはレーヴァーキューンであること、しかし、心理学的にはむしろツァイトブロームであることを思い知った。というのは、私の表現の仕方は一本気で不器用であったからである。イロニーとエレガンスにはまだなじみなかった。

第三帝国におけるドイツの運命が、『ファウストゥス博士』のなかで初めて、大きな関連性のなかで描かれていることがわかった。これまで過去への私の眼差しを閉ざしていたカーテンがするすると上がって、圧倒するような眺望が開けたのだ。近代精神史のドラマが厳粛に荘厳に舞台にかけられたのだ。この長篇小説は私にとって並みはずれた指導力を持っていた。これは、(音楽史を例にして) 精神・文化の世界における一種の秩序を与えただけではなく、私を音楽の世界にも結びつけ、キリスト教徒でドイツ人である私の出自を、善のなかでも悪のなかでも描いて見せたのだ。

当時、少なくとも、私の心をとらえていたのは、芸術家の諸問題であった——ひらめくことのないインスピレーションとあらゆる手段の枯渇というあの問題設定、これは『ファウストゥス博士』に関しては、今日、最も焦眉のものであり、今なお読む価値のあるものである。ほかのどこにも、音楽がこれほどの確に言葉に翻訳されたことはない。ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven) のピアノソナタ作品第111番についての素晴らしい分析を読んだ人なら、そのあともはるかに精密に、内面的に、深く音楽を聴くだろう。ファウスト小説の国民的要素とナチズムに関する解釈は説得力が弱くなっているけれども、少なくとも神学的なものは魅力的である。悪魔との契約はもはや正しく機能しているとは言えない。取引の基盤がもはや現実に合わないのだ。しかし、悪魔がいなければ、ファウストも決定的な重要性を失う。われわれの時代はもはやファウスト的なものを感じられない。神々は退位させられた。われわれは巨人のように神々と競うことはもはやない。ファウスト素材はもはや時宜を得たものではない。ディレクターたちがこの素材に関心を持つとす

れば、そして、ファウストを規範として選ぶとすれば、ファウストが現実性を持っているからではない。ファウストの魂を買うには、その魂が不死でなければならない。そうでなければ、魂は悪魔にとって何の価値もないのだから。

第1部—第18章

神についての考えを推し進めることに関して

—トーマス・マンの『ヨセフとその兄弟たち』

アブラハム (Abraham) とサラ (Sara), イサク (Isak) とレベッカ (Rebekka), ラケル (Rachel) とレア (Lea) とともにヤコブ (Jacob), ヨセフ (Joseph) とポティファルの妻 (die Frau des Potiphar)——トーマス・マンの大長篇小説『ヨセフとその兄弟たち』を読んだ人は、聖書の登場人物たちを暗記シテイル (par cœur)。そして、過剰な精密描写によって想像力を封じ込めてしまう映画化の場合とは異なり、こういう補助手段は極めて歓迎できるものだ。きわめて取るに足りない副次的な人物たちにも、名前が与えられ、アイロニカルに精密な描写が加えられる。「イルタニ (Iltani) と呼ばれたその婢女は、こぼれ落ちたパン屑を両手の指先で、だらりと垂れた乳房のうえからたびたび払い落していた。」トーマス・マンは、あらゆる人物にまなざしを向け、形姿、人相、心理を描き出すので、木版画に描かれた聖書のテキストが生命を吹き込まれて生き生きと目覚めるのだ。

こういう場合には、20世紀からの心理的なものがその過程に入り込んでいるのは確かだが、しかしそれにもかかわらず、マンは、「そう、三千五百年前はそうだったのかもしれない」という印象を抱かせるのだ。まったくそのとおりだ。そのとおりだ、と笑ってしまうほどだ。というのは、マンはいたるところにもっともらしさを見出し、案出するからだ。ヤコブが婚礼の日の新月の晩に、甘美なまなざしのラケルの代わりに、奥深いまなざしのレアを押しつけられたとき、どうしてあからさまな策略が可能になるのかという疑問が起る。犬頭神アヌプ (Anup) が平然と解説するところによると、深夜があらゆる女性を同じ存在にしてしまうのだ。「だって、女の身体なんてものは、どいつもこいつも似たり寄ったりで、愛したり子供を生んだりするにはどいつだって一向構わないわけだからな。」男の身体だって同じことか？ そうだ。というのも、トーマス・マンはこの箇所では、個体を幻覚と見なし、特定の個人的人間にほれ込んだ状態を、自然が単に種族を繁殖させる目標を目指すために行う、取るに足りない策略として嘲弄するショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer) のペシミズムを取り入れているからだ。

トーマス・マンは、この長篇小説を1926年から1942年までの16年かけて書き上げ、最後には、非常に多くの手書き原稿に膨れ上がり、2,200ページからなる4巻本が生まれた。ヨセフ作品は、自分が倒れ伏してしまわぬための杖であり棒であった。深刻で残酷な激動の時代に、マンは悠然と流れるような70,000行の小説を突き付けた。この小説は、善人の成功をテーマにしている、ユーモアに満ちた和緩的な調子で語られ、人生の不安と過酷な要求のいっさいに深い安堵の気持ちを提供するものであった。遅さというものを発見したのはシュテーン・ナドルニ (Sten Nadolny)³⁾ が初めてではない。「言いやうもなくのんび

りと、時間などには頓着なく」、ヨセフはミディアン人の商人と一緒にエジプトへ行く。歩いたり、ラクダに乗ったりして何週間もかけて、一步一步歩きさえすれば、もうそこには距離が生まれる、それが生み出される前進のことを気にしないので、個々人には何もできない道程が、楽しみをともなって、巨大な量を生み出すのだ。このようにして、ヨセフが旅をするように、トーマス・マンは書いた。この長篇小説は、最初はイライラした読者の気持ちを、時間とともに、平静さを取り戻させる。この小説を読み終えるには数週間必要とする。急いではないのだ。聖書の話は周知のことなので、結末に向かって緊張があるわけでもない。筋の運びに緊張感があるだけなのだ。ヤコブがラケルに燃え上る思いを抱いたのは、やや近視の、よどみなく語りかけるような、とろけるような愛らしい夜のように黒いまなざしではなかったか。エジプトの高官ポティファルの貞淑な妻が、自分の所有するヘブライ人の奴隷に自制心もなく恋に落ちるようなことがどうして起きたのか。ヨセフがファラオに夢の解釈を行ったとき、細部はどうだったのか。アブラハムが神を発見したとき、どうだったのか。

この小説を読んで深い安らぎを得られる根底には、憧憬の充足を毅然としてあきらめるといふ、あるがままの人生との了解がある。恐ろしいものが排除されることも、見落とされることもないが、垣根でおおわれている。あらゆる存在が、悪をも含めて、禁欲的に肯定される。神は善ではなくて、全体なのだ。神は悪の責任を負ってもいるのだ。カインの役割は必然性とともに演じられなければならない。「たしかに」と、マンは、カインに神に対して敢然として、「私は自分の弟を打ち殺しました」と言わせている。しかし、「こんなことをするような悪い衝動を、だれが私に植えつけたのでしょうか。あなたはご自分ひとりで全世界を担っていると言っておいでですが、それなのに、私たちの罪を担うことはご免蒙るとおっしゃるのですか」とも言わせている。

ところが、神はわれわれの罪を担おうとするのだ。ここでもほかの多くの個所でも、トーマス・マンは旧約聖書の世界からキリストを指し示している。十字架にかけられ、再び復活した人は、どこかの洞穴に行き、ヨセフのように、ふたたび高みに導かれる希望を抱くことを許されるすべてのひとびとのモデルなのだ。下降と復活は根本リズムであり、神々のあいだでも人間の間でも、天上でも地上でも、死と新生のような交換遊戯が行われる。

この小説が教えるのは、自由を誇る個人への上方への解放ではなく、模倣であり、足跡をたどること (das Nachahmen und In-Spuren-Gehen) である。自分がアベル (Abel) なのかカイン (Kain) なのか、ラケル (Rachel) なのかレア (Lea) なのか、羊飼いなのか猟師なのか、おのれの模範を探してみるがよい。自分は、計算できないいっさいをたわごととみなすラバン (Laban) のような土の塊のような人物なのか。自分は辛辣で世才のあるテイエ (Teje) なのか、イクナアトン (Echnaton) のような夢想家なのか。人類の始祖としての義務をはたすために、みずからの愛を断念しなければならないことを告げられるヤコ

3) [訳注] ドイツの小説家。『遅さの発見』(Die Entdeckung der Langsamkeit) を書いた。

ブなのか。それとも、去勢されてはいるが好意のあるポティファルなのか。ポティファルは、もしかするとまさに去勢されているがゆえにもものわかりがよいのかもしれない。それとも、まさか美しく貞潔なヨセフとでも。それとも今日はこの人、あすはあの人になぞらえるのか。だれにもどこかに居場所や納まるべき場所があるものだし、あこがれをすべてあきらめることになっても、そのことをわきまえている。通例、他人の境遇になりたいと思う人間はいないものだ。自分の模範を見出してしまい、もはや自分だけをたのみにすることができなくなるときには、それが万人にとって支えとなる。役割は役割であって、悪人や、みじめな人間や、奴隷の役割であっても、生きることに関わり立つものだ。この大いなる同意が要求する、一切を断念することのかわりに、せめてもの慰めとして、トーマス・マンは200ページを費やして、自分が苦しい思いを味わいつくしてまで獲得したハッピーエンドを読者諸氏にふるまうのだ。現代の美学では、禁じられた技を使うとなると、すなわちハッピーエンドで終わらせることになるのだが、マンはあえてそれを自分に許可した。しかし、際物を避けて作品を仕上げたことが、マンの独立性と偉大さを示している。

私個人にとっては、ヨセフ小説は卓越した宗教的な意味を持っている。この小説は宗教批判を無力化する。トーマス・マンは、ニーチェ (Friedrich Nietzsche) から出発し、誰でも神を人間のおおきな空想を投影したものとしてイデオロギー批判的に暴露することができたことも知っていた。それにもかかわらず、マンは無神論者にはならなかった。マンは、アブラハムに神を発見させ、神についての考えを推し進めさせるのだが、そこから、神が存在しないという結論を引き出すことをしないで、驚嘆すべき到達点 (Pointe) を指し示すのである。すなわち、われわれ全員に対して、神についての考えを推し進めることに参画せよ、と提言するのである。これは文化を生み出す仕事であり、神の像を生み出す詐欺行為ではない。神話の仕事は人間にとって善いことである。神と人間はお互いに高めあう。「神性を純化すれば、人間を純化することになる。」神の理念は、人間にとって天上へのあこがれを拡げる羽なので、もはや人間は簡単には獣性に転落することはないのだ。

もちろん疑問は残っている。文化的にすぎない、戯れにすぎないような宗教性で、自分自身への信頼が得られるのか。それは宗教性の最後の傾注行為にすぎないのではないか、もろもろのファンダメンタリズム⁴⁾の嵐が、ほんのついでに吹き消してしまうような弱い炎にすぎないのではないか。そういう問いが発せられるのは常の事であるが、それがどうであろうとも、ヨセフ小説は私の読書人生全体の最大の出来事であり、これからもそうあり続けるであろう。その魅力は再読するたびに新たになるのだ。

【テキスト】

Hermann Kurzke: *Die kürzeste Geschichte der deutschen Literatur und andere Essays*. München: Verlag C. H. Beck OHG 2010, S. 11-14 (Eine Bibliothek der Verdrängung. *Thomas*

4) [訳注] 原理主義。アメリカのルター教会正統派の思想で、聖書の創造説を固く信じ、進化論を否定する (小学館『独和大辞典』1985年による)。

Mann, „Doktor Faustus“, S. 68-71 (Vom Hervordenken Gottes. *Thomas Mann, „Joseph und seine Brüder“*).

【付記】

トーマス・マンの作品からの引用訳文に関しては、下記を参照させていただいた。

『トーマス・マン全集』新潮社 1971-72年

トーマス・マン『ヨセフとその兄弟 I』望月市恵・小塩節訳 1985年

トーマス・マン『ヨセフとその兄弟 II』望月市恵・小塩節訳 1986年

トーマス・マン『ヨセフとその兄弟 III』望月市恵・小塩節訳 1988年

なお、『ヨセフとその兄弟たち』の固有名詞に関しては、望月・小塩訳に従った。